

ガールズ&パンツァー グロリアーナの流星

流水郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「わたくし考えましたの！ 新しい戦車がダメなら、今ある戦車をドツカーンとパワーアップすればいいのですわ！」

ローズヒップのその言葉を聞いて、私は察した。要するに、クルセイダーをもっと速くできないか、という意味だと。

いいさ。情熱と理性、おしやべりと無口、大家族と一人っ子、乗員と整備員、赤と青。正反対だからこそ、私たちは手をとり合おう。

貴女はもつと、速くなれる。

目次

前編	1
後編	19
エピローグ	39

前編

我が聖グロリアーナ女学院は歴史ある学校だ。学校自体の歴史のみならず、戦車道においても、である。戦車発祥の地であるイギリスの伝統を受け継いでいるのだから、当然と言えば当然だ。

今日は学校の記念館に展示されている、Mk. IV戦車の点検日だった。私は装甲板の壁に囲われた空間で、その中に鎮座するエンジン、そして大きなギアボックスと格闘していた。この105馬力エンジンに火を灯すには、その間を繋ぐクランクを4人がかりで回さねばならない。

まったく、陸上軍艦とはよく言ったものだどつくづく思う。ある後輩の言葉を借りれば「横にした菱餅のような」形をしたこの戦車は、世界最初の実用戦車たるMk. Iの改良型だ。船舶と同様、常に乗員がエンジンの面倒を見なくてはならないし、サスペンションがないから揺れも船並ときている。それでも送風ファンがついているため居住性は良くなっている。

一人で操縦できないのはMk. Iと同じだ。車長―陸上軍艦―だから艦長カーと操縦手、右変速手、左変速手の4人がかりでないと、車体の向きすら変えられない。こんな車両を整備しても、今時戦車道で使うことはない。我が校でも記念館の飾りとなっっているけれど、イベントではたまに走行するから定期的なメンテは欠かせない。

エンジンの赤いカバーを外し、内部を点検する。後で学友たちを呼び、始動テストもしなくては。今の私は作業着姿で革手袋をはめ、鏡がないので確かめられないけど、恐らくは顔まで油で汚れている。この出で立ちを見て、気品溢れる聖グロリアーナの生徒だと思う人はいないだろう。だがダーズリン様も他の隊員さんたちも、私たち整備員に敬意を払ってくれる。家にいる時よりずっと楽しい。

何より、好きな機械を思い切り触れる。コンピューターなど無かった時代、試行錯誤しながら作られた乗り物たちだ。先人たちの苦難に思いを馳せながら、エンジンに油を注し、紅茶を味わう。グロリアー

ナ整備員の醍醐味だ。

「……With a tow, row, row, row, row, row, To the British Grenadiers」

シリンダーを点検しながら、自然に英国擲弾兵行進曲を口ずさむ。こうした空間で一人で機械を弄るといのはなかなか良い時間だ。今ここには私とメカの二人きり。・例えば全裸になって整備をしよう、咎める人はいない。

だが、そうした時間はふいに終わることもある。

「こちらにいらっしやいましたかー!? ブルーマロウ様ああ!」

装甲板で囲われた車内に、彼女の大声が反響した。砲弾が積まれていたら振動で誘爆するのではないかというような、無駄に元気の良い声だ。

『上品で優雅』を旨とする我が校の戦車道チームにおいて、こんな大声を出すメンバーは一人しかいない。そしてその声はどうやら、右側面に取り付けられた6ポンド砲ー対戦車用の物とは違う、一次大戦期の骨董品だーの砲身を通ってきたらしい。

止むを得ず作業を中断し、6ポンド砲の砲尾から外を見る。ライフリングの刻まれた砲腔・の向こうに、こちらを覗き込んでくる目が見えた。

「ああー やっぱりいらっしやいましたわ! 日々の整備、お疲れ様でございます!」

私と目があうと、向こうは嬉しそうに劳いの言葉をかけてくれた。それは良いとして、訓練時間に何故彼女がこんな所にいるのだろう。仮にも小隊長である彼女が。

「ブルーマロウ様! 本日はご相談があつて参りましたのですわ! わたくしのクルセイダーは一体……」

一方的にまくしたてる彼女を他所に砲から離れた。いくら私が機械好きだからと言って、砲腔を通じて会話をするなんて話があるか。

第一彼女の声は広い所で聞いた方が耳に良い。

ちらりとエンジンを見て、少し待っててね、と声をかける。

車体上部にある四角いハッチを跳ね上げ、車外へ顔を出した。その途端、後輩の顔が間近に迫った。由緒ある赤いタンクジャケットを着た、可愛い後輩が。

「わたくしのクルセイダーが大規模修理とは一体、何処が悪くなったのですの!？」

深刻な表情で、そして大きな声で尋ねてくる、愛すべき赤毛の後輩……ローズヒップ。一年生にして我が校のクルセイダー小隊を率いる、優秀な戦車長だ。手に持つティーカップには名前の由来となった、バラの実のお茶が入っている。飲んでしまったのかこぼしたのか、半分程度しか残っていない。荒く息を吐きながら、頬を紅潮させている。

彼女の質問に、私は言葉ではなく行動で答えた。手袋を外し、彼女の左胸をつつく。少しプニツとした。

「え？ まさか戦車が乳癌に!？」

違う。その脂肪の下だよ。

「ああ、心臓！ エンジンですよのね！」

どうやら理解したようだ。こう見えてそこまで馬鹿な子ではないし、以外と勉強熱心だから、自分の戦車の欠点は分かっている。クルセイダーは故障が多いことで有名なのだ。それでも戦車道一試合くらいなら、十分に耐えられる。というより、私たち整備班が保たせる。

本来戦車は戦闘機と違い、作戦後に基地へ帰還して整備を受けられるわけではない。ましてクルセイダーが実戦で使われたのはアフリカ戦線なので、砂塵によって部品がどんどん磨耗した。しかも船積みする際、冷却水を入れずに走らせるという馬鹿をやったせいで、エンジンの寿命が余計に縮んだ。

だが戦車道は戦争と違い、試合前後にはちゃんとした整備所でメンテナンスできる。その上私のような超絶技巧のメカニックがいるのだから、少なくとも試合中に故障でリタイアなどという無様な事態は起こさない。

とは言ってもやはり、来るべきときは来てしまうのだ。このスピード狂のローズヒップといい、その部下といい、実に荒々しい乗り方をしてくれる。この前、援大洗義勇軍に参加したときもそうだ。活躍自体は惚れ惚れするものだったけれど、酷使されたりバティエンジンはつい先日、とうとう限界に達した。

しかし自分の戦車が修理中とはいえ、訓練に顔を出さずに済む立場でもないだろうに。曲がりなりにも小隊長なのだから。

「ブルーマロウ様！ わたくし、今日は小隊長としてご相談に上がりましたのですわ！」

私の考えていることを察したのかどうなのか。ローズヒップは菱形戦車の上で正座をし、改まって話を始めた。

「ダーズリン様もアッサム様も、我が校に新しい戦車を加えたいと頑張つてらっしゃいますの！ だけどOG会の方々がなかなか許してくれないそうでございますのよ！」

知ってる。整備員とて、私も幹部候補に名を連ねている身なのだから。

「あら、ご存知でしたか！ 流石はブルーマロウ様ですわ！」

大いに感心した様子で、カップに残ったお茶を口へ一気に放り込むローズヒップ。一気飲みは駄目だとか、そういう指導はアッサム様に任せよう。人間のメンテナンスは私の領分ではない。

それで、この子は何が言いたいのだろうか。

「つまり！ わたくし考えましたの！ 新しい戦車がダメなら、今ある戦車をドツカーンとパワーアップすればいいのですわ！」

ドツカーン、の所で派手に両手を広げた。カップの底に少しだけ残った雫が宙を飛ぶ。毎度のことだ。

要するに、クルセイダーを修理するついでに強化してくれと言うのか。

「お分りのようでございますわね、ブルーマロウ様！ そう、わたくしたちのクルセイダーに更なる力を与えて欲しいのですわ！ それができるのはブルーマロウ様しかいないのでございます！」

縋るように私の肩を掴み、懇願するローズヒップ。常にハイテン

シヨンだが、表情はコロコロと変わる。見ている分には本当に面白い後輩だ。

ただ、彼女のクルセイダーにはすでに手を加えてある。クルセイダー Mk. III の砲塔は二人乗りだが、それでは車長が装填手を兼任せねばならず、指揮に専念できない。砲を2ポンド砲に弱体化すれば三人乗れるし、実際にイギリス軍は2ポンド砲搭載の Mk. II を指揮車両に使った。

しかし火力の低下は嫌だというローズヒップたちの要望に応え、レギュレーションの範囲内で砲塔に改造を施した。砲弾をいくらか減らし、装備品の位置をずらすなどして強引にスペースを作り、細身の女の子なら3人乗れるようにしたのだ。荒々しい機動戦術に耐えられるよう、足回りも強化した。さらにエンジンの調速機^{ガバナ}、つまりリミッターの解除を走行中に行えるようにしてある。

私の入魂のセッティング。すでに『ローズヒップスペシャル』と呼んでもいいレベルだと思う。

「あつ、もちろん今までの改造の件は本つつつつ当に感謝してございますことです！ ですがわたくしなりに我が校の未来を考えて、より強い……より速いクルセイダーが必要だと思うのですわ！」

力説するローズヒップの目は真っ直ぐで、淀みがない。言っていることは本当だろう。彼女なりにグロリアーナの未来を考えているのは事実だ。もちろん当人のスピード狂も影響しているだろうが。

それにしても、何故この子は私が考えを口にする前に察してしまうのか。

「あら、ごめんなさいですわ。お話しにくかったでしょうか。わたくし、気が早いですのー！」

知ってる。気が早い、朝も早い、寝るのも早い。昇進も早かった。一年生でありながら小隊長を任せられるというスピード出世だ。

そんな聖グロリアーナ最速の女。ローズヒップから頼りにされているというのは先輩として、整備員として誇りに思うべきなのか。彼女の指導役たるアッサム様も同じような気分なのか。そう思いながら彼女の顔を見ていると、あることに気づいた。いつも通り、澆刺と

いた笑顔を浮かべている。しかし息遣いが少し苦しそうなのだ。頬が赤いのは走って来たからかと思っただが……。

素手でローズヒップの前髪を持ち上げ、額に触れる。掌にじわりと熱さを感じた。

「……ブルーマロウ様、お手が冷たいのですけれど、冷え性ですか?」
「貴女が熱いんだ、この馬鹿!」

反射的に怒鳴りつけた。一瞬怯んだローズヒップの背中、そしてふとももに腕を回し、ぐつと抱き上げる。装填手の人たちほどではないが、整備にも力は必要だ。

唾然とする彼女を抱えたまま、菱形戦車の横に設置したタラップをゆっくりと降りる。丁度そのとき、記念館の中にパタパタという足音が響いた。ローズヒップの全力疾走とは違い、抑え気味の、上品さを保った駆け足だ。

「あつ、ブルーマロウ様」

私に気づき、小柄な後輩が駆けてきた。ローズヒップ同様、赤いタンクジャケットに黒のスカートを身につけた戦車乗員である。オレンジがかったブロンドの髪を後頭部で結った、おっとりとした印象の子だ。

オレンジペコ。我が校の隊長車装填手にして、名実共にダージリン隊長の腹心。

タラップを降りローズヒップを床に座らせたとき、彼女はすぐ側まで歩み寄っていた。軽く息を弾ませながら。

「ローズヒップ様がいきなりいなくなつたので、探していたのですが……」

私の怒鳴り声、それに続いて整備員が乗員を抱きかかえている光景を見て、少々戸惑ったようだ。しかしオレンジペコは勘が良い。私とローズヒップを交互に見やり、常況を察したようである。

赤らんだ顔できよんとしていたローズヒップも、ようやく自分がどうなっているのか理解したらしい。

「もしかして……わたくし、熱がありますの?」

……この子は多分、ぶっ倒れるまで気付かず走り回るタイプだ。と

りあえず、オレンジペコが来てくれて助かった。明るい場所に出てみると、私の作業着は予想以上に油まみれだった。

「この格好で医務室へ行くのは気が引ける。お願いしていいかな？」

「お任せください。ローズヒップさん、立てますか？」

真剣な表情でローズヒップの手を取り、立ち上がらせる。さすが装填手だけに力は強い。対するスピード狂は戸惑いつつも、私の方を振り返った。

「で、でも、わたくしは……」

食い下がる彼女を、私はじつと睨みつけた。大人しく休めというメッセージを込めて。それは上手く伝わったらしく、ローズヒップは抵抗を諦めた。

「ブルーマロウ様を困らせては駄目ですよ」

「……ハイ。失礼いたします」

こちらに一礼して、二人は背を向けた。以前までオレンジペコはローズヒップを避けているように見えただけ、最近は交流も増えたらしい。

私と正反対の、粗野で、品がなくて、情熱的で、とても可愛い後輩。まったく、殺されても死にそうにないくらい丈夫な子なのに、とんだ鬼の霍乱だ。戦車が故障したかと思えば、乗っている人間までこの有り様か。

「……ブルーマロウ様」

こちらを振り返ることなく、ローズヒップは呟くように言った。

「わたくし、もつと速くなりたいのですわ。ダージン様のお力になりたいし、もつと強い敵に勝ちたい。大洗の変なティーガーを見てから、尚更そう思うのです……」

オレンジペコが心配そうに、私とローズヒップを交互に見る。私が無言で見送ると、二人はそのまま立ち去った。

記念館のドアが閉まる音を聞き、ふとため息を吐く。・やっぱりあの子は私の心が読めるのだろうか。変なティーガーこと、大洗女子学園のプルシエティーガーの名を出すとは。

少し血が熱くなった私はMk. IV戦車の中に戻らず、傍らの小さ

な椅子とテーブルに腰掛けた。

グロリアーナの生徒の嗜みとして、ティーセットもちやんと用意してある。ガラス製のポットには水色のハーブティーを淹れておいた。私のニツクネームの由来である、ウスベニアオイのお茶だ。透き通った清涼感のあるブルーが美しい。時間が経つと妖艶な紫色になるのが特徴だけど、今回は水出しだから変化に時間がかかる。お気に入りのカップに注ぎ、そこへ蜂蜜を足す。ブルーマロウ自体は味が薄いのだ。甘酸っぱいバラの实のお茶とは、色も味わいも対照的である。

「……ふむ」

・ 色を愛でつつ紅茶を飲み、ふと記念館の中を見回した。歴史ある・聖グロリアーナ女学院だけに、戦車道関係以外にも数多くの品が展示されている。絵画、昔の写真、賞状、記念碑、昔使われていた車。由緒あるティーセット。

Mk. IV戦車の横には、これまた古めかしい戦闘機が展示されていた。布張りの複葉機で、重ねられた翼の間は支柱と線で支えられている。操縦席は一人乗りで吹きさらしだ。機首には木製の2翅プロペラ、そしてエンジンのカウルには2つの機関銃。それを覆うカバーが「瘤」に見えることから、この機体は『キャメル』の名で呼ばれることになった。菱形戦車と同じく一次大戦にて活躍した名機だ。

私は思った。ローズヒップはこの『キャメル』のような子だ、と。この機体の心臓は星型ロータリーエンジン。ロータリーと言っても自動車用とは仕組みが違う。クランクシャフトを機体に固定し、エンジン自体が回転するという過激な代物だ。当時の空冷エンジンはそうして風に当て続けないと、すぐオーバーヒートを起こしてしまうのだ。重いエンジンが高速で回転しているわけだから、その反動が機体に加わり、不安定な操縦性を生む。

『キャメル』はそれに加えて意図的に機体を不安定に設計されており、当然ながら事故が多発した。しかし慣れたパイロットならそれを利用し、凄まじい機動力を発揮できる。一次大戦で最も多くの撃墜記録を残したのは『キャメル』なのだ。

過激な機体を乗りこなすのもパイロットの名誉。第一次大戦とは

そういう時代だったのかもしれない。ローズヒップのようなじやじや馬娘を使いこなすのも、指揮官たるダーズリン様の名誉か。

では、そのじやじや馬娘を満足させ、それでいて聖グロリアーナのエレガントさを保てる戦車を仕上げれば……それもエンジンアたる私の名誉だろうか。彼女が小隊長になってから、私は何かと相談を受けてきた。前回の改造の件もそうだし、故障の起きやすいクルセイダーだけに、こちらも真摯に対応した。それに彼女の乗り方は荒っぽくても、雑ではないのだ。だから彼女が戦車をどんなに壊して帰ってきても、私は文句を言わず直した。

「……やってみようか」

脳裏に閃いたアイディアを書き出すべく、胸ポケットから手帳とペンを取り出す。

大丈夫だ、ローズヒップ。貴女はより強い相手に勝ちたいと言ったけれど、私にも勝ちたい相手がいる。

だから、貴女の望みに応えよう。

……鬼の霍乱から三日後、私はダーズリン隊長に呼び出された。要件は分かっている。提出した計画書の是非についてだ。

廊下を歩きながらふと窓ガラスを見つめ、映った自分の姿を確認する。身だしなみに問題は無し。いつもの私だ。色の薄い短めの髪、平均的なスタイル、たまに「目つきが冷たい」と言われる顔。確かにローズヒップの愛嬌のある目や、オレンジペコの柔らかな目とは似つかないと、自分でも思う。以前黒森峰の生徒から「うちの制服が似合いそう」と言われたこともある。

だが今着ているのは紛れもなく、我が校の赤服。由緒あるタンクジャケットだ。胸に整備班のバッジを付けている以外、乗員と変わら

ぬ出で立ち。言ってみればこれが正装だ。

指定の部屋でドアをノックし、中からの「どうぞ」という声を聞く。静かにドアを開けるといつもの三人ノーブルシスターズと呼ばれているーが迎えに来てくれた。やはりいつもの調子で、テーブルのテイススタンドを囲んでいる。

「ブルーマロウ、入ります」

「お疲れ様。さ、座って」

カップを置き、我らがダーズリン隊長が微笑む。オレンジペコと同じく後頭部で編んだ髪型はいつも整っており、仕草は常に優雅なお方だ。もつとも単に優雅では片付けられない人だが。

オレンジペコが椅子を引いてくれたので、お礼を言って着席する。ティーカップに紅茶が注がれた。湯気と共に、微かに薔薇の香りがする。デインブラ、それもクオリティシーズンの茶葉か。オレンジペコが調達したのだろう。良い品だ。

お茶を味わいつつ、隊長の前に置かれたA4用紙の束に目を向ける。クルセイダーの強化改修プランだ。

「ローズヒップは明日には登校できるそうよ」

「つくづく鬼の霍乱ですね。でもこの計画を見たら、さぞ喜ぶでしょう」

ダーズリン様の言葉に、アツサム様が苦笑いする。私同様につり目がちな目つきなのに、この方の場合には不思議と可愛らしく見える。長いブロンドの髪と黒いリボンのアクセントが、それを引き立てている。

アツサム様は我が校の隊長車砲手であり、諜報員であり、そして事実上ローズヒップの教育係でもある。一言で片付ければ『苦勞人』。だからこそ、内心ではあのじゃじゃ馬を一番心配しているだろう。

だがそれより、『この計画を見たら』という部分が重要だ。

「……私のプランは承認されたと受け取っても？」

問いかけたとき、ダーズリン様は丁度紅茶を啜っていた。アツサム様が代わって答える。

「ええ。エンジンはすでに手配済みよ。ラジエーターの改修について

は連盟の審査を受ける必要があるけれど」

「私の見立てでは、認可は降りるでしょうね」

カップを置いたダージン様が、微笑を浮かべてじっと見つめてくる。相変わらず、底意の見えない笑顔だ。はつきり言うのと、このお方はローズヒップとはまた違った意味の変人である。それでも一軍の将たるに相応しい器の持ち主であり、その勇猛かつエレガントな闘いぶりに魅せられ、戦車道の門を叩く生徒も多い。私の整備技術も認められて、いろいろと良くしてもらっている。

そんなダージン様は私の計画書をめくり、二番目の項目に視線を落とした。『クルセイダーを改修する意義について』である。書いた内容は、新車両の導入が困難なら既存の車両を強化すべきという、ローズヒップの主張の妥当さ。そして新車両導入のためにもクルセイダーを強化すべきという、私自身の見解だ。

「今ある車両を強化することによって、OG会を安心させる。貴女みたいな技術屋さんから、こんな発想が出てくるなんてね」

隊長はくすりと微笑み、バターを塗ったスコーンを一口食べた。この方もまた、OG会との折衝を続けながら戦力強化を図っている苦労人なのだ。

我が校の生徒には誇るべき互助精神がある。特に戦車道チームのOGは卒業後も強固に結束し、チームへの資金援助、卒業生の就職先斡旋など、様々な形で支援してくれるのだ。

OG会は三つの派閥に分かれる。まずマチルダ会。在学中マチルダII歩兵戦車に搭乗していた人たちだ。我が校の主力だけに最も人数が多く、在校生の面倒をよく見てくれる。資金・物資面での援助もこの会からの物が一番多い。しかしその分、在校生への干渉も多いのだ。資金面で余裕があるのに、17ポンド砲搭載車両を導入できないのも、概ねこの派閥から圧力がかかるせいである。

次にチャーチルVII歩兵戦車の乗員が加入する、チャーチル会。我が校のチャーチルVIIは一両しかないため、人数は最も少ない。ただし隊長経験者も多いので、発言力は強い。考え方は保守的だが、在校生が他派閥から不興を買った際は何かと取りなしてくれる。

そしてクルセイダー会。グロリアーナにおいて、クルセイダー巡航戦車はあまり人気がない。故障の多さと整備の手間、そしてもう一つ『ある理由』が原因だ。だからこそ、あの車両に乗ることを選んだ人たちは結束が非常に固い。そしてクルセイダーに並々ならぬ愛着を持っている。より強力な巡航戦車……例えばクロムウエルやコマツトの導入によつて、クルセイダーの活躍の場が奪われることを危惧しているのだ。

「クルセイダーを強化することで、既存の車両を大事にする姿勢を示す。そうすれば先輩方も安心して、新車両の導入を認めてくれる、ということね」

「ニルギリさんのクロムウエルも、ちゃんと部品が調達できますね」
アッサム様とオレンジペコもそう言ってくれた。ダージリン様の努力によつて、今年の全国大会では一両のクロムウエル巡航戦車をエントリーできた。しかし修理部品が入手できず、大洗への義勇軍には派遣できなかったのだ。だがクルセイダー会が味方につけば、部品の供給ルートも確保できるだろう。17ポンド砲を搭載したチャレンジャー巡航戦車の配備も可能かもしれない。

私の考えを彼女たちが認めてくれて、一先ず安堵した。ダージリン様の仰る通り、私は技術屋、職人だ。政治的なことは専門外。だが今回はプランの必要性をアピールするため、知恵を絞って考えた。

「私はね、ブルーマロウ」

こちらを真っ直ぐに見つめ、ダージリン様が再び口を開く。

「OG会の先輩方の気持ちも分かるし、伝統を守るのは大事なことだと思っっているの。けれど新しい物を取り入れてこそ、伝統は次へ受け継がれて行く」

「同意見です、隊長」

お世辞ではなく、心から同意の言葉を返した。技術の進歩もまた同じことだ。

するとダージリン様は澄ました顔で、お約束の台詞に取り掛かった。

「こんな格言をご存知？ 『評論家の言葉に耳を傾けてはならない。』

評論家の銅像が立ったことなど無いのだから』

「ジャン・シベリウス」

フィンランドの作曲家だ。様々なジャンルの名曲を作った偉人で、イギリスの評論家からは「ベートーヴェン以降最高のシンフォニスト」とまで評された。しかしその一方、非常に他人からの評価を気にする人物だったと聞く。ダーズリン様の引用した台詞はそんな自分を変えようという、決意の言葉だった。

「評論に真摯に耳を傾けるのも大事だけど、他人の意見に振り回されてばかりでは仕方ない。でもやっぱり、周りの目を気にしないというのなかなか難しいわ」

「ローズヒップはそれができる子です」

分かっていたことだ。悪く言えば傍若無人だけど、ローズヒップはただひたすら真っ直ぐに生きている。他人の目を気にせずに。彼女はこの聖グロリアーナに足りない物を持っているから、ダーズリン様に重用されている。見ていて面白いからでもあるだろうけど。

「ブルーマロウ。貴女が職人アルティサンなら、ローズヒップが芸術家アーティスト。他人の意見に踊らされない、貴女たちの作品を楽しむに待っているわ」

不敵な笑みを浮かべ、優雅に紅茶を飲む隊長。恐らく、私の本心はお見通しなのだろう。ローズヒップを思い切り走らせてやりたいことも、勝ちたい相手がいることも。

アツサム様が手配してくれた品は、なんと翌日に届いた。クルセイダー会の先輩方が手助けしてくれたおかげだという。まさかこんなに早く効果が出るとは。はつきり言ってOG会関係の話は改造を實行するための大義名分だったが、結果的に学校の役にも立てそうだ。荷解きされたエンジンは学校の車両修理場へ運ばれ、ローズヒップ車の横に置かれた。機関室は空になっており、そこへこの新品エンジンを搭載する。

「……はあ」

ピカピカのエンジンを見つめ、私は思わず嘆息した。やはり美しい。シリンダーのカバーの銀の光沢、上面に突き出たキャブレター。ラジエーターの回転数を制御するファンドライブなど、もはや官能的にさえ見える。

ロールス・ロイス製V型12気筒エンジン『ミーンティア』。航空機用の傑作エンジン『マーリン』から過給機を除去、キャブレターやファンドライブなどのパーツ変更を行い、戦車用に改修した物だ。原型がスピットファイア戦闘機やランカスター爆撃機など、多くの傑作機の心臓となっただけに、信頼性も高い。正式に搭載されたのはクロムウエル巡航戦車以降だが、クルセイダーにも試験的に搭載された実績がある。

本来クルセイダーが搭載している『リバティ』も、原型はアメリカ戦時標準局の航空機用エンジンであり、一次大戦期にイギリスへ引き渡された。このエンジンはシリンダーブロックが一体成型となっておらず、各シリンダーをそれぞれボルトで本体に固定しているという、構造上の問題がある。不整地を高速で走行するとそのボルトに緩みが多発し、故障を起こすのだ。つまりクルセイダーは機動力が売りの戦車なのに、エンジンがそれに耐えられないのである。

ただしより軽量の戦車では問題を起こさなかったから、欠陥品ではなく単に旧式というべきかもしれない。より新しく洗練された『ミーンティア』との差は歴然としている。

このピカピカのエンジンも使い込まれていくうちに煤けて、なんとも渋みのある姿になるだろう。それを眺めながら紅茶を味わうのもまた至福の時間だ。今から楽しみで仕方がない。シリンダー部に頬を寄せると、ひんやりとした感触が心地よかった。早くこれに火を灯し、雄叫びを聞いてみたい。だが今のうちに、この肌触りを存分に堪能しておくのも良いだろう。

両手を手の届くところまで伸ばし、抱きつく。シリンダーに混合気を送るパイプが、すぐ目の前にある。V型エンジンなので片側に6本つつシリンダーが並び、それぞれにパイプが繋がっている。それを指でなぞっているうちに、恍惚感が湧き上がってきた。自然と息が荒く

なり、シリンダーカバーがうつすらと曇る。

「ああ、素敵……」

これを私室へ持ち込む許可を、ダーズリン様に求めるべきだった。そんなことをしてどうするのかと聞かれれば、私はこう答える。まず服を脱ぎます、と。

「こちらにいらつしやいますか!? ブルーマロウ様ああああー!」

突拍子もない大声に、心臓が大きく飛び跳ねた。大慌てで愛しいエンジンから離れ、近づいてくる足音に向き合う。

復活したローズヒップが修理場の中を駆けてきた。赤髪を揺らし、目を煌々と輝かせ、紅茶をバシヤバシヤこぼしながら。思わず身構えた。彼女が私の2メートル前で急停止しなければ、足払いをかけた後に踵落としてトドメを刺していたかもしれない。

私も彼女も、汗をかき、息を荒げていた。ただ私の場合は冷や汗だ。一応病み上がりという自覚はあるのか、ローズヒップはマスクを着用している。それが薄い赤色に染まっているあたり、うっかりマスクを外さずにお茶を飲んでしまったのだろう。やはりこの子は88mm高射砲で撃たれても死にそうにない。

続いて小さな足音も近づいてきた。必死で彼女を追いかけて来たらしい、オレンジペコだ。まったく、当分ローズヒップをこちらへ来させるなど言ったのに。何か尋ねられたら「すっごーい!」とか「たーのしー!」とか適当な言葉を連呼して誤魔化せとも言ったのに。

「ダーズリン様が喋ってしまったんですよ……」

私の視線から言いたいことを察したのか、オレンジペコは疲れた表情で言った。なるほど、ならば責められないか。

「これが新しいエンジンですね! よく分からないけど最高ですわ、ブルーマロウ様!」

小躍りしながら喜ぶローズヒップ。まあ、改造完了まで隠しておくのはどの道無理だったか。オレンジペコも苦笑しながら、興味深げに『ミューティア』を観察する。彼女たちは良い子だが、こうしたエンジンの持つ官能的な美しさは分からない。残念なことだ。

「それでそれで！ どのくらいの速度が出せるのでございますか!？」

エンジンの周りをちよこまかと動き回りながら、ローズヒップが尋ねてくる。私は両手を突き出し、指を8本立てた。彼女はカッと目を見開く。

「80……!?!」

「そこまで速くなるのですか!?!」

オレンジペコまで驚きの表情を浮かべた。改修の概要はダージリン様から聞いていたようだが、資料全てに目を通してはいなかったのだろう。彼女も忙しいのだ。

クルセイダー Mk. III の最高速度は43 km/h、リミッターを外せば60 km/h。もちろん戦車は常に最高速度を出せるわけではないが、大幅なパワーアップと言える。さらに私のプランが全て通り、ラジエーターなどの改修ができれば、その上も狙える。

「重さ約27tのクロムウエル Mk. I を、時速64 kmで走らせるエンジンだからね。それを20t程度のクルセイダーに積むんだ」

解説してあげながら、ローズヒップのクルセイダーをちらりと見る。そろばん玉に例えられる、独特な傾斜装甲を持つ砲塔が特長だ。装備しているのは43口径57mmの、オードナンス QF 6ポンド砲。サスペンションはクリスティー方式だが、履帯無しでの走行はできない。足回りは5つの大径転輪で車重を支えている。この方式は走破性に欠けるが高速走行には向いており、22個もの小径転輪を持つチャーチルとは真逆の設計だ。

常時稼働状態にないクロムウエル巡航戦車を除けば、この車両がグロリアーナ最速である。我が校は歩兵戦車による浸透強襲戦術を得意とし、それだけでは勝てない相手ならばクルセイダーが投入される。

ただし鈍足のマチルダやチャーチルと隊列を組んでは機動力を活かせないばかりか、装甲が薄いため真っ先に撃破されてしまう。大抵は別働隊として、奇襲・攪乱に活躍するのだ。

そのためクルセイダー小隊の隊長は速断即決ができ、命令への従順さと独立心を併せ持ち、尚且つクルセイダーの欠点を受け入れられる

度量のある人でなくてはならない。そのため上級生に適任者がいなければ、一年生にその役が回ってくることもある。

だからローズヒップを小隊長にしたダージリン様の判断は間違っていない。個人的にはそう思うし、事実として成果も上げている。私の作る特別仕様車も、使いこなしてくれると信じている。

「ああああ、待ちきれない！ ブルーマロウ様、早く改造してくださいまし！ 出来上がり次第すぐにかっ飛ばしますわ！」

ただ。私は彼女を絶望の淵へ落とさねばならない。

「あのー、ローズヒップさん。改修作業が終わっても、まずは慣らし運転が必要だと思いますから。しばらく全開走行は無理かと……」

おずおずと忠告するオレンジペコ。私の代わりに言うべきことを言ってくれた。本当に物の分かった子である。そうでなくてはダージリン様の懐刀にはなれない。

ローズヒップの方は愕然とした表情で、私に継るような目を向けてくる。彼女としては真剣なのだろうが、ローズヒップテイーで赤く染まったマスクのせいで、真剣さのかけらもない顔だ。こうなると分かっていただけから、改修の件は内緒にしておくよう言ったのに。

とりあえず、こくりと頷いて見せた。耐えなさい、という意味を込めて。

「わ、わたくし……三日間も寝込んでいて……ほ、ほ、本当でしたら、今すぐにでもかっ飛ばしたいくらいで……」

小刻みに震える彼女を見ると、さすがに胸が痛くなる。この子の性格からして、ベッドから動けない生活というのは辛かっただろう。早く走りたいのは分かる。とはいえ他のクルセイダーは今訓練中で、予備車両はちょうど分解状態だ。

私は静かに、修理場の隅に置かれた車両を指差した。あれなら一応50km/h出せるよ、という意味で。

カヴェエナントー巡航戦車。クルセイダーの双子の姉妹と言える車両で、砲塔はクルセイダー Mk. Iと同じだ。しかし単に壊れやすいクルセイダーと違い、こちらはまごう事なき失敗作。ラジエーターの放熱板が正面にむき出しな上、その配管が車内を通っているため車内

温度は40℃を超える。履帯が細すぎて走破性も劣悪、そのくせステアリングがやたらと利く危険な操縦性を持つ。

使わないから修理場に置きっ放しになっているだけで、一応ちゃんと動くはずだけど。

「ブルーマロウ様、それはあまりに酷です」

オレンジペコから静かに突っ込まれた。ごもつともだ。ここにあっても邪魔で仕方ないから、かつ飛ばすついでにそのまま他所へ移してもらえないかという、淡い期待を込めての提案だった。菱形戦車同様、記念館に展示しておけばと学校に提案したが、「他校から馬鹿にされる」という理由で却下された。名前の由来を考えれば、学園艦の教会に飾っておくのも良いかもしれない。今度具申してみようか。

まあ、カヴェナンターの行く末より先に、ローズヒップを何とかしなくてはならない。床に屈みこんで指で「の」の字を描くという、あまりにもベタな落ち込み方を始めた。とりあえずテコか何かでどかすとして、彼女が元気に慣らし運転をこなせるよう、一計案じる必要が生まれた。

後編

いろいろ考えた結果。

私たちは広大な演習場を持つ、サンダース大学付属高校の学園艦へやって来た。ミーティアエンジンを搭載したクルセイダーと、ローズヒップ及び乗員3名、整備 兼 監視役の私。

今いるのはさしずめ西部劇のような荒野だが、遠くを見ると草原や市街地、砂浜など、様々な地形が用意されていた。砂浜はご自慢の巨大プールと繋がっており、上陸訓練もできるとのことだ。さすが50人以上の戦車道履修生を抱える学校なだけある。

「ああっ、砂浜！ 砂浜ですわ！ 水着を持って来れば良かったですわ！ あっ、ブルーマロウ様、あそこのアレは何でございましょうか!?!」

「人工降雪機だね」

物珍しい光景にテンションを上げるローズヒップ。ノロノロ運転でも、初めて見る景色の中でなら耐えられるだろう……そう思って他校の学園艦で慣らし運転をすることにしたのだ。サンダースの隊長が話の分かる人で助かった。

「では、準備にかかります！」

敬礼をして自車へ駆け戻る彼女を見送り、一緒に持ち込んだユニバーサル・キャリアの点検をする。カーデンロイド豆戦車を拡大したような、装軌式輸送車だ。荷台にはクルセイダーが故障した際の予備部品を積んであり、私はこれに乗って随伴する。重量3・8tの小型車両だが、何かと使い勝手が良いので重宝されてきた。

ローズヒップは渡したチェックリストを手に、乗員たちと共にクルセイダーの各部を点検する。こういうところは真面目な子だ。

「Hi！ ブルー。調子はどう？」

不意に声をかけられ、振り向く。話の分かる隊長こと、ケイさんがいつの間にか側へ来ていた。サンダースらしいシンプルなジャケツトを来て、下半身はホットパンツにニーソックス。ワイルドさと可愛らしさを兼ね備えた出で立ちだ。白い歯を見せた笑顔に、ウェーブの

かかった金髪がよく似合っている。

「おかげ様で、何とかかなりそうです。急な話を引き受けてくださり、本当にありがとうございます」

「いいのいいの、堅苦しいの抜きで。うちはいつでもオープン！ つていうのが流儀だから」

大きく手を広げて笑うケイさん。サンダースの気質、それも良い面のみを抽出したような人で、仲間の信頼も厚いという。ダーズリン様はサンダースの戦い方を「下品」と評しているが、なんだかんだで認めている節があるのも、ケイさんの人柄故か。

「演習場内は好きに走ってくれて大丈夫よ。でも街中へ行くなら、危ない運転はしないでね」

そう言いながら、ケイさんは愛車の点検に勤しむローズヒップをちらりと見た。この人も大学選抜との試合に参加したので、少し心配もあるのだろう。当人は操縦手を共に、チェックリストを手に各部を見ていた。こういうところは真面目な子だ。

「ご安心ください。大丈夫です」

私はわざとらしいくらい真剣な顔をして、胸ポケットに入れたペンを指差した。

「万一暴走したときはコレで、あの子の眉間を撃ち抜きます」

「NOOOOOO!」

ケイさんは体を仰け反らせ、オーバーリアクションで返してくれた。私はダーズリン様と違い、こういうブラックジョークしか言えない。ケイさんは冗談の分かる人だが、他校の生徒相手にやると真に受けられることが多かった。聖グロリアーナの生徒はペン型拳銃を持つていてもおかしくないとか、そんなイメージを持たれているのだろうか。実際にそんな物を持つとなると暴発が怖いけど。

そのとき。エンジン音が聞こえ、遠くを走行する戦車が見えた。目を凝らして見ると、M4シャーマンではない。砲塔は『イージーエイト』ことM4A3E8と似ているが、車体形状はM26パーシングのようになんかできていた。シャーマンは元々星形エンジンを搭載する設計だったため、V型エンジン搭載後も車高が高いのは変わらない

かったはずだ。シャーマンからパーシングまでの間に開発された、試作車両の一種か。

「ああ、アレはちょっとレア物だよ。T23中戦車」
「なるほど」

名前は知っていたけど、本物を見るのは初めてだ。アメリカで開発された戦車で、特徴はガス・エレクトリック方式で走行すること。つまりガソリンエンジンで発電機を稼働させ、電気モーターで走るのだ。これなら電流の量を調整するだけで操向・変速が可能で、ギアチェンジが必要ない。

鉄道や船舶ではよく使われていた方式だけど、戦車用として信頼性に難がある……と、アメリカでは判断された。砲塔はM4A3E8へ流用されたが、T23自体は「250両の限定生産」という意味不明な結末を迎え、実戦投入はなかった。

サンダースには多くのレア車両が保存されていると聞く。けれど演習場に引っぱり出してきたということは、試合に出すことを想定しているのか。シャーマン・ファミリーで戦うのがこの学校のポリシードさうだけど。

「分解されてジャンクヤードに置かれてたんだけど、うちの整備科の要望で急遽レストアしたのよ」

こちらから尋ねる前に、ケイさんは答えてくれた。

「大洗のポルシェティーガーにライバル心燃やしてね」

合点がいった。そういうことか。

ガス・エレクトリックを採用した初の戦車は、戦車黎明期である一次大戦で生まれた。フランスのサン・シャモン突撃戦車だ。しかし日本で一番有名なのはやはり、ポルシェティーガーことVK4501(P)だろう。

ポルシェ博士の趣味と妄想の産物、などという批判もあるが、発想は間違っていないと思う。戦車の武装と装甲がどんどん発達していった当時、その重さに変速機が耐えられるかという問題があった。ならば機械式の変速機自体がいらぬ方式を採用するのは理に適っている。

問題はそれをじっくりと試験し、問題を解決する余裕がドイツにはなかったということだ。

だから大洗が全国大会の決勝戦でポルシエティーガーを使ったとき、シヨックはそこまで大きくはなかった。現代の工作精度で作った部品を使い、私のように腕の良いメカニックが整備すれば、なんとか使い物になるだろうから。そんな腕利きが無名校にいたことには感嘆したし、ダージリン様が彼女たちに入れ込むのも理解できたけれど、それだけだった。

シヨッキングだったのはそれからだ。ネットで見た大洗女子の広報番組で、彼女たちはポルシエティーガーをこともあろうに、ドリフト仕様にセッティングしていたのだ。そればかりか、大学選抜との試合では後付けの緊急加速装置を使い、スリップストリームまでやったのだ。

何故ポルシエティーガーでそこまでやりたがるんだ、もはや一種の病気だ、大洗女子学園は変態の学校だ。そう言ったらダージリン様から「自分のことを棚に上げるのは良くない」と注意された。

「大洗の大番狂わせはエキサイティングだったし、あの子たちのことも大好きよ。だけど私たちって、強豪校として高校戦車道をリードしてきたわけだし、整備科はそれを支えてきたプライドがあるもの」

そう語るケイさんの視線の先で、T23は滑らかな旋回を見せていた。さすがサンダースだけに、冴えたメカニックが揃っている。

続いて彼女は私を振り返り、ニヤリと笑いつつウィンクした。

「負けてられないじゃない？ やっぱり」

軽薄に見えて、芯の通った笑顔。500人以上いる隊員の、頂点に立つだけのことはある。

私は無言でユニバーサルキャリアに乗り込んだ。ペダルを踏んで感触を確かめる。この車両の操縦は自動車と同じ、円形のハンドルで行う。垂直に取り付けられているため、船の舵輪のような印象も受ける。

ケイさんは口を尖らせて、私の顔を覗き込んできた。

「何よ、だんまりっ」

「喋ることがありません。私の考えていることは全て、貴女が言ってしまうました」

次の瞬間、ケイさんは破顔大笑した。こちらも少し笑みがこぼれる。私と同じことを考えている人は他校にもいたのだ。大洗の自動車部に負けていられない、と。

そのとき、『ミーティア』エンジンの唸り声が聞こえた。ローズヒップのクルセイダーが始動したのだ。すでにそろばん玉型の砲塔へ乗り込んだ彼女が、こちらへ向けて叫んでいる。声はエンジン音でかき消されたが、口の動きで分かった。準備完了なようだ。

「では、行ってきます」

右手を上げて答え、続いてケイさんに向けて敬礼をする。彼女は親指を立て、再びウインクをくれた。

「ディナーと一緒に食べましょ。うちの整備科にも紹介したいし」
「いいですね。是非とも」

サンダースの隊長は満足げに、踵を返して立ち去った。こちらもキャリアのエンジンを始動した。荷台の中央に据え付けられたフォードV8エンジンが目覚まし、リズムカルな音を立てる。次いで通信機器の組み込まれたヘッドセットを被り、咽頭マイクをしつかりと喉に当て、スイッチを入れた。

「ローズヒップ、聞こえる?」

《はい! 感度良好でございますッ!》

元気一杯の返事だ。この前落ち込んでいたときとは大違いで、切り替えの早さに驚かされる。

出発、と告げると、彼女はそれを操縦手に伝えた。クルセイダーがゆっくりと動き出す。こちらもハンドブレーキを解除し、クラッチを繋ぐ。履帯がカタカタと動き出した。

両開き式の砲塔ハッチを開け、ローズヒップは半身を乗り出して走行していた。右手にティーカップを持って。散歩の始まりである。

その日の慣らし運転は無事に済んだ。約束通りケイさんたちと一緒に食事をし、我々は聖グロリアーナ女学院の学園艦に戻った。他校の整備科の人たちと話をするのは大変に有意義で、良い刺激をもらった。

食事も美味しかった。隅で売られていたMREには手を出さなかったが、料理のバリエーションも多かった。サンダースの皆さんはカリフォルニアロールについて「笑っちゃうわよね」「これはこれで美味しい」などと評していた。やっぱりあの方々も日本人ということか。かく言う私たちグロリアーナの生徒も、たまに猛烈に日本茶が飲みたくなる。

それにしても、ローズヒップは食べるのが速い。尋常でないくらいに速い。ハンバーガーを食べただけで拍手された人なんて初めて見た。彼女の家は18人の大家族だそうで、奪われる前に自分の食事を完食する癖がついているらしい。和食のときは味噌汁をご飯にかけて一気にかきこむのだとか。

「あ、もちろんアッサム様の前ではもうやりませんわ」

夜道を歩きながら、満足げに笑うローズヒップ。私を察までエスコートしてくれるとのことだ。校内の警備体制は行き届いているけど、彼女のなりの感謝の表れだろう。

「それにしてもブルーマロウ様の召し上がり方、気品が溢れてらっしゃいましたわ！ タコスってあんなにお上品に食べられる物でしたのね！」

よくわからない褒め方をされた。確かに作業中片手で食べられる料理は好きだし、手先は器用な方だから具をこぼさないように食べるのは得意だ。テーブルマナーも英国流のを心得ているし、ローズヒップへの指南をアッサム様から頼まれたこともある。人間のメンテナンスは専門外だと言って断ったけれど。

「わたくしも立派な『お嬢様』を目指して、精進いたしますわ！ テー

ブルマナーはちよつと苦手でございますけど、石に齧り付いてでも覚えませうよ！」

我が後輩は拳を振り上げて宣言した。彼女はダーズリン隊長やアツサム様、オレンジペコ、そして私のような『お嬢様』に憧れている。だからこの学校に入ったのだと、すでに聞いていた。隠し事がない子なのだ。

だがそれを聞いてふと、あることが気にかかった。

「……ローズヒップは、自分の家族は好き？」

「もつちろん、大好きですわよ！」

笑顔で即答するのを見て安心した。家族が嫌で別格の生き方を目指しているのだとしたら、悲しすぎる。少なくとも彼女には、そんな理由で頑張つてほしくない。

「そういえばブルーマロウ様のご家族は何人いらつしやいますの？」

「お父様だけだよ。とても優しい人さ」

ふと、思い出した。自分が機械弄りにのめり込んだきっかけを。

お父様は普段仕事で海外へ行くことが多く、たまに帰ってきても次の日にはまた出かけてしまう。誰よりも私を愛してくれているのに。世話をしてくれる人はいたが、早くに母を亡くし、姉妹もない私は無性に孤独だった。

小学生のある日、私は父を外へ連れて行ってしまう憎い機械……お父様の車をバラバラに分解した。家に整備マニュアルなどがあつたので、工具を持ち出して全て自分でやった。そんなことをしても父が家に居続けることはない、子供ながらに分かつてはいた。ただ状況に反抗したいただけだった。私が車を弄つたのは、それが初めてだった。「私は十分幸せな人間だけど、貴女みたいに大勢の家族に囲まれて育つた人が、少し羨ましい。食事の取り合いも……ちよつとやってみたかった」

私の言葉に、ローズヒップは少し複雑そうな顔をした。彼女にとっては私もダーズリン様のような、『憧れのお嬢様』に分類されるのだろう。そんな相手から「羨ましい」と言われたことに違和感を覚えたのかもしれない。結局、人間は自分とかけ離れたものに憧れるのだろ

う。

そのとき、私たちは足を止めた。整備科の寮に着いたのだ。洋館風の建物にはまだ明かりが灯っている。一応門限はあるが、戦車道関係者は夜遅くなることも多いので、管理人も融通を利かせてくれる。

ここまででいいよ、とローズヒップに言った。

「わざわざ送ってくれて、ありがとう」

「いいえ、お安い御用ですわ!」

いつもの調子で、澆刺とした返事だった。

「家族をお守りするのには、当たり前のごとでございませう! おやすみなさいませ!」

ぴしっと敬礼をして、我が後輩は走り去った。いつもの如く、電光石火の俊足で。

家族。さらりと言われた言葉を、心の中で反芻する。

父の車は美しく、壊すのが心苦しいから分解という手段に出た。しかし何も考えずひたすらバラしていくうちに、機械の仕組みに夢中になっていった。

お父様には当然叱られたけど、それから機械の本や工具をたくさん買ってもらえた。メカニックの才能を見出してくれたのだ。それを読んで勉強して、電子工作に挑戦したり、古い車を修理したり、機械が遊び相手となった。気づけば根っからの技術バカになり、整備士として戦車道の門を叩いた。

そしていつの間にか、1人ではなくなっていた。

「……おやすみ、ローズ」

街灯に照らされる『家族』の後ろ姿に、私は小さく呟いた。

……そして。

慣らし運転も改造も順調に進み、問題点の洗い出しと改善を行い、

プラン通りの改造車が出来上がった。『ミーティア』エンジン搭載に加え、ラジエーターもロールス・ロイス製に換装した。キャバリエ巡航戦車で試みられたタイプで、ラジエーターを作動させるのに必要なエンジン出力が大きく減っている。つまりパワーロスが少なくなり、より効率的に速度を上げられる。

サスペンションなども細部に改良を施し、ブレーキの効きも強化した。継続高校のBT-42に触発されてか、装輪走行はできないかとローズヒップに相談されたが、それはさすがにレギュレーション違反だから諦めてもらった。

ひたすらに機動力を強化した改造だ。火力があまり高くなく、装甲も薄いクルセイダーにとつて、有効射程まで敵に肉薄する機動力は生命線である。もちろん偵察と攪乱でも活躍できるはずだ。戦車道に使える車両でこれに追いつける物があるとすれば、チューンナップしたI号戦車C型くらいだろう。しかもエンジン出力に余裕があるため、故障も格段に減る。

全てが私の計算通りに機能するか、今日明らかになる。いよいよ全開走行試験だ。

私は自ら車長席へ乗り込むことになった。というのも、ローズヒップが自分で操縦したいと言い出したためである。

「不肖ローズヒップ、この時を待ちわびていましたわ！」

喜色満面、といった様子で、クルセイダー Mk. III の車体に駆け上がる。日本戦車と同様、車体右側が操縦席だ。四角いハッチを開けると、ローズヒップは恥ずかしげもなく中へ滑り込み、座席に腰掛けた。

恥ずかしげもなく、というのは別に操縦すること自体が恥というわけではない。この戦車はある程度恥を捨てねば操縦できない設計ということ。それが故障率の高さに次ぎ、クルセイダー不人気の理由でもある。ギアの切り替えレバーが操縦席の中央部、つまり操縦手の脚の間にあるのだ。

要するに、ガニ股で操縦しなくてはならない。マチルダイもそう

なのだが、あちらはレバー基部の形状が違うので、そこまで大きく脚を広げる必要はない。

そして我が校の伝統ある戦車道制服はスカートだ。試合中に誰がどうやって操縦手のスカートの足を覗くのか、と言われれば確かにそうだ。シフトレバーに隠しカメラでもつけければ別だが、それが無いかの確認も整備班の点検項目にある。普通は見られる心配はないだろう。しかし『いかなる時も優雅な戦車道』を標榜する聖グロリアーナ女学院において、わざわざガニ股で戦車を操縦したいと思う者はいない。

「この操縦席の座り心地、久しぶりですわ！」

ハッチから中を覗くと、ローズヒップはペダルの踏み具合を確認していた。とても楽しそうに、そしてガニ股で。そもそもこの子は戦車の外にいるときでさえ、はしたなく脚を広げて座る。いつも走り回っているせいか、引き締まった綺麗な脚をしているが、そのせいで余計に行儀の悪さが目立つ。

今のクルセイダー操縦手たちは「最初は操縦席に座るのが恥ずかしかつたが、小隊長を見ていると気にならなくなった」と語る。朱に交われれば、というやつだ。それが良いか悪いかはダーズリン様が決めることだろう。

調子つ外れな鼻歌、よく聞けば英国擲弾兵行進曲だと分かる。ローを歌いながら、ローズヒップは右手側のスリットを開閉した。その下には視察用バイザーにはめ込むプリズムの予備、消火器などが並んでいる。左手側は元々小砲塔が据えられていたが、Mk. IIIIでは6ポンド砲の弾薬庫となっていた。シフトレバーの奥にある大きな円柱には、コンパスが据えられている。砂漠という砂の海で戦ったクルセイダーだけに、このような装備は特に必要だったのだろう。

私も自分の持ち場へ向かう。正面から見ると六角形の、そろばん玉型砲塔へ登った。この砲塔を『プリティ』と評したダーズリン様は戦車の魅力をよく分かってらっしゃる。後部には四角い雑具箱が設けられていた。

クルセイダー Mk. I、Mk. IIIの砲塔ハッチは後ろへスライド

させる一枚板だったが、開けた状態でしつかり固定しておかないと勝手に閉まる欠陥があった。車長が頭を出した状態でそれが起きるとグロテスクなことになるため、このMk. IIIでは左右に跳ね上げて開く方式に改められている。

砲塔内へ入ると、先に乗っていた装填手と砲手がこちらを見た。強引に3人乗りに改造した砲塔なのでやはり狭苦しい。また今回は普段のクルセイダー乗員ではなく、ダーズリン様が抜擢した2名を乗せている。

「どうして私が乗っているの……？」

そうぼやくのはルクリリ。三つ編みのよく似合う、私の親友だ。大洗救援作戦の際、数多くいるマクルダ乗りの中から義勇軍に選ばれた精鋭でもある。今回は「勉強のため」という理由で、ダーズリン様に搭乗を命じられた。

「親友よ、それは貴女が同じ相手に二度も騙されたからだ」

「それは言うな！ だいたい関係ないだろう！」

ルクリリの顔が真っ赤になった。あの失態はトラウマになっているらしい。だが関係なくはない。いざというときに油断する癖を矯正するため、油断ならない操縦手と同乗させる……と、ダーズリン様は仰った。

そんな彼女に、装填手のオレンジペコが苦笑を浮かべた。彼女はダーズリン様の後釜になることを期待されているから、様々な戦車に乗っておくのは良いことだ。ただし、さすがにローズヒップと同乗するのは不安が拭いきれないようだ。

「ルクリリ様、ジェットコースターに乗ると思いませんか」

「だったらアンツィオの隊長でも呼べばいい！」

「あそこにはダーズリン様が散々迷惑をかけたから駄目だよ」

文句を言いながらも、ルクリリは砲や照準器のチェックを行っている。根は真面目だ。6ポンド砲の左にはベサ機関銃があり、右斜め上には小さな黒い筒がついている。2インチ発煙弾の発射器だ。マクルダIIの発煙弾発射器は砲塔側面についているが、クルセイダーとチャーチルは内蔵型で、戦闘中の再装填が可能だ。

ヘッドセットを装着し、咽喉マイクを首に巻く。これは声帯から声を拾うマイクで、エンジン音に邪魔されず会話ができる。

「ブルーマロウ様！ 準備完了ですわ！」

ローズヒップが元気良く伝えてきた。いよいよだ。私も胸が高鳴る。

「エンジン始動」

目覚めろ、『ミーティア』。

ローズヒップが点火スイッチを入れ、少しの間を置いてエンジンが動き出した。車体を小刻みに振動させ、唸る芸術的V12エンジン。やはり車内で聞く音も格別だ。このまま恍惚に浸っていたいが、私のにやけ顔に対してルクリリとオレンジペコが冷めた視線を向けてきた。車長としての役割に専念することにしよう。

信号弾拳銃を手にし、砲塔右側の天井付近にある箱から弾を取り出す。その近くには給脂箇所を示した図面が貼られている。

「車長準備よし」

声は咽喉マイクから通信機を経由し、学友たちに伝わる。私は整備員ではあるが、乗員に体調不良などがあつた際の交代要員も兼ねているため、乗車経験はあつた。

「砲手準備よし」

「操縦手準備よし！」

「装填手準備よし」

砲塔から顔を出し、演習場の草原を見渡す。丘の上に設置された貴賓席——誰が座っているかは説明不要だろう——を見上げつつ、信号銃に弾を装填する。重い撃鉄をぐつと引き起こし、空へ向けて引き金を引いた。快音と共に手に反動が加わり、赤い光弾が打ち上げられる。

貴賓席の人影が手を振るのが見えた。いつもあの方側にいるオレンジペコに代わり、アツサム様があそこでデータ収集を行っている。砲塔に置いてあつた紅茶を手に取り、息を大きく吸い込んで号令をかける。

「前進！」

「行きますわよ！」

ギアが切り替えられ、アクセルが踏まれ、クルセイダーは動き出した。最後の起動輪スプロケットが履帯を回し、ゆっくりと前進する。エンジン音に異常はない。

「時速40までゆっくり上げよう。油温に異常があったらすぐに報告して」

「了解ですわ！」

脚の間にあるレバーを一段ずつ切り替え、ローズヒップは徐々に増速させていく。徐々に、と言っても『リバティ』エンジンとは出力が違ふ。ぐんぐんと速度は伸びていった。エンジン音の響く中だが、ローズヒップは微かなギアの回転音にも耳を澄ましながら操縦を続けている。

「さすがに加速力が凄いですね」

オレンジペコが感想を漏らした。普段は路上で23km/hしか出ないチャールズ歩兵戦車に乗っているため、ミーティア・クルセイダーの乗り心地は新鮮だろう。私も顔に当たる風が心地よい。

ふいに「おととと」という謎の声を発し、ローズヒップがアクセルを緩めた。あつという間に40km/hを超えてしまったのだろう。その後再度加速し、速度は一定に保たれた。

「はいッ、今時速40でございます！」

「計器に異常は？」

「ございません！ すっごく良い手応えですわ！」

歡喜の声を挙げる後輩。さすがに今までは馬力が段違いだ。

ちらりと後ろを向き、エンジンルームを確認する。音も排気も異常はない。乾燥したラジエーターもちゃんと機能しているようだ。

体に当たる風を感じつつ、右へ旋回するよう命令する。右側の履帯が減速し、クルセイダーは弧を描いて走った。滑らかな動きだ。

続いて左旋回、スラローム走行と命令を出し、ローズヒップはスムーズにそれを実行していった。良い調子だ。この間一定の速度を維持している辺りに、彼女の技量の高さを感じる。そろそろか。

「加速だ。一直線に全開走行」

「待つてましたわ！ かつ飛ばしますわよ！」

歓声に続き、吠えるエンジン。砲塔の二人が対衝撃姿勢をとった。私も開口部の縁に掴まり、少し姿勢を低くする。右手に持ったカップにはいつものブルーマロウティーが入っているけど、今は味わっていない。

風圧を顔と体で感じ、50 km/h、60 km/hと速度が上がっていくのを察する。速度計が信用ならなかった時代、飛行機乗りはこうして速度を測ったという。エンジン音が轟々と響き、無限軌道が戦車を前へと運び続ける。12本のシリンダー内で動くピストンがクランクシャフトを回す、その過程を想像すると、私の心臓まで大きく脈打った。

「な、なんて加速だ……！」

「これが『ミーティア』の力……！」

直接風を感じない二人も、体にかかるGで勢いを察していた。歩兵戦車乗りからすれば恐ろ的な加速でもあるだろう。しかし私は怖いとは思わない。エンジンもラジエーターが計算通りに稼働しているし、ローズヒップの腕は信用している。

「時速80！ 80出ましたわあ！」

レシーバーに彼女の声が聞こえ、「よし」と呟く。戦時中の試験で出た、ミーティア・クルセイダーの最高速度だ。私はその少し上を狙えるようにセツティングした。

「81……82……83……」

ジリジリと上がっていく速度計の目盛を、ローズヒップが読み上げていく。その興奮に震える声を聞き、くすつと笑ってしまう。本当に、楽しそうに乗ってくれるんだから。私の計算では最低でも、87 km/hまでは大丈夫なはずだ。

「85……」

前方にいた小鳥が一斉に逃げるのを見送り、レシーバーから聞こえてくる報告に耳を傾ける。

「……86……87……」

「そこまで。時速60まで減速して」

文句を言われるかと思つたが、ローズヒップは・素直にアクセルを緩めた。もつとも『リバティ』搭載時のクルセイダーは60km/hが最高だったのだから、物足りないということはないだろう。『ミーンティア』ならその速度を維持できる。

「最高！ 最ツツツ高ですわ、ブルーマロウ様！」

「よし、次は躍進射撃の試験だ。4時方向へ転進、射撃目標に向かつて」

この上なくハイテンションな後輩にそう命じると、ルクリリが恨めしそうにこちらを見上げてきた。

「……やるの？」

「そうでなくては貴女がそこに座っている意味がないじゃないか、大親友」

簡単に言うな、とぼやきながら、6ポンド砲の肩当に掴まって急回頭に耐えるルクリリ。オレンジペコは訓練用の模擬弾を手に取り、装填の準備をしている。

躍進射撃とは移動中にある程度照準を合わせておき、急停車後に発砲するテクニクだ。サスペンションが柔らかすぎると停車後に車体の揺れが収まらず、素早い射撃が困難である。戦車のサスペンションは衝撃吸収性に優れていれば良いという・ものではないのだ。エンジン換装に伴って足回りも調整したので、これが射撃に支障をきたさないか試さなくてはならない。

目標を確認。無線操縦に改造されたマチルダⅠ歩兵戦車で、整備科の友人たちに操作してもらっている。実際戦時中に開発された代物で、射撃演習の標的とか、爆薬を満載して敵陣へ特攻させるとか、いろいろ使い道は考えられていたらしい。結局どれも費用対効果の問題で中止になったそうだ。我が校の物はスクラップ状態だった車両を使い、我々整備科が試験的に作ったものである。普段はお茶菓子の配達などに使われているが、時折こうして動的射撃にも使われる。

「速度を維持しつつ突撃し、距離500mで射撃」

「言っておくけど、初弾命中は無理だ！ 砲身の癖が分からないからな！」

座席から立ち上がり、U字型の肩当に右肩をフィットさせるルクリリ。マチルダもクルセイダーも、砲塔旋回は機械で行うが、俯仰は人力で直接砲を上下させる。そのために大きな肩当がついているのだ。要するに、現代のスタビライザーの役割を人間が行うということになる。慣れれば高い命中率を発揮できる構造だ。ただし高速化したクルセイダーでそれができるか、それも試すべきことだ。

「用意」

大まかに距離を測りながら、マチルダの側面へ突進する。実戦ならば敵の反撃を察知し、回避しながらの突撃になるだろう。ティーカツプをしつかりと握り締め、タイミングを計る。ルクリリが体を屈伸させて俯仰を調節しつつ、ハンドルを掴んで砲塔を回す。

視界の中で、サイドスカートを装着したマチルダの可愛らしい姿が、どんどん大きくなっていく。歩兵戦車なら装甲を、巡航戦車なら機動力を生かして肉薄することが、我が校の勝利の鍵だ。

「停止！」

「はあああつー！」

大仰な掛け声と共に、ローズヒップはブレーキペダルを踏み込んだ。圧搾空気がブレーキを作動させ、起動輪の回転が止められる。既に対衝撃姿勢を取っていた我々は、急停車の衝撃にもなんとか耐えた。

車体が前のめりになり、サスペンションの力で元に戻り、揺れ動く。オレンジペコが砲尾へ模擬弾を挿入し、握りこぶしで押し込んだ。閉鎖機が作動し、発射準備が整う。

「撃て！」

揺れが収まった瞬間、叫んだ。ルクリリが撃った途端、轟音と振動が体を震わせた。砲口から発砲炎が広がり、空葉莢が砲尾から蹴り出される。

刹那、無線マチルダの砲塔に赤いインクが飛散した。命中である。

「命中確認」

「ルクリリ様、お見事です」

「凄いですわ、ルクリリ様！」

後輩たちから賞賛を受けても、ルクリリは少し啞然としていた。自分で言った通り、初弾で当てる自信はなかったのだろう。砲身にはそれぞれ違った癖があるのだ。

だがやがて、彼女は不敵な笑みを浮かべた。

「ふふふ……運に助けられた面もありますわね。しかし私の砲撃の腕も捨てたものでは……」

「よし、それじゃあもう一度」

「まだやるのか!?!」

当たり前だ、一回だけでは試験にならないだろう。本当は正規のクルセイダー乗員にやらせるべきだが、ダーズリン様の深い^まお考え^れでルクリリが乗せられた以上、今日のところは彼女に頑張ってもらおう。

「ああつ、クソツッ！ あの速度で人力で砲の安定を保つのは結構きついんだぞ！」

「やっぱりそうかな。砲の俯仰を機械式にして、ジャイロスタビライザーを積もうかとも考えているけれど」

アメリカへ送られたクルセイダーがそのような改造を受けたと聞いている。ただそれをやるとなれば、砲塔の容積が心配だ。今でさえ強引に3人乗っているのだから、これ以上機械が増えれば乗員を減らす必要が出そうだ。それに普段ルクリリが乗っているマクルダIIは鈍足で、砲も軽量な2ポンド砲なので感覚の違いは大きい。普段からクルセイダーで6ポンド砲を扱っている子たちなら、また意見も違うかもしれない。

やはりこれはまだ試験を重ねる必要があるだろう。大洗の自動車部に負けてはられないが、こちらはあの学校と違い、危ない橋を渡る必要性は薄いのだ。冒険も大事だが、堅実に問題点を潰していくのも大事だ。

「あのう、ブルーマロウ様。少し気になったのですが……」

オレンジペコがおずおずと、私の紅茶に目を向けた。

「そのお茶、今の急ブレーキでも溢れないどころか、跳ねてもいないように見えたのですけど……」

「よく見ると、今も全く揺れてもいないような……」

ルクリリもティーカップを覗き込んでくる。二人の目の前で、私はカップを垂直に傾けてみせた。紫色のブルーマロウティーは微動だにせず、カップに張り付いている。

「ゼラチンで固めてあるんだ」

「この卑怯者！」

……その後、私はルクリリから放送禁止用語で罵られたりもしながら、改造クルセイダーの試験を続けた。躍進射撃と行進間射撃を繰り返した後、足回りを点検する。破損箇所はなく、オレンジペコが私のセツティングを賞賛してくれた。

そして日が傾きかけたころ、我々は車庫へ戻ることになった。ルクリリは安堵し、オレンジペコが労いの言葉をかける。

ローズヒップはというと、静かに操縦レバーを握っていた。

「ローズヒップ、どうだった？」

「最高でしたわ。本当に、飛ぶような加速ですもの」

返事は明るかったが、声がいつもより落ち着いていた。燃え尽きたのか。ずっとあのテンションでは無理もない。

これで今日の試験は全て終わり。もう少し調整の時間を取れば、この改造車を試合で使えるだろう。ローズヒップが勢いに乗れば、必ず活躍してくれる。今日はこれで帰還して良いはずだ。

それなのに。ローズヒップの「飛ぶような加速」という言葉を聞いて、ふとある思いつきが浮かんだ。整備時の手間を増やすことになるし、今やる必要はない。しかし私は何故か、それを実行したくなってきた。

私がローズヒップを羨ましいと言ったとき、彼女は意外そうだった。お互いに正反対の人間だ。生まれ育った境遇も含めて。でも結局、人間は自分と違う相手にこそ憧れるのかもしれない。

ローズヒップはお淑やかなお嬢様に。私は彼女のような情熱的な女の子に。

左手側を見ると、ダーズリン様が陣取っているのとは別の、小高い

丘があった。丁度おあつらえ向きだ。

「ローズ、もう少しだけ遊ぼう」

今だけ、彼女の様になってみよう。無謀で情熱的で、冒険心に溢れる戦車乗りに。

ルクリリとオレンジペコが目を見開いて私を見る。ローズヒップも体を逸らして、操縦席から私を見上げてきた。

「9時方向へ転進。全速力で丘を越えて」

「あつ、了解ですわ」

ローズヒップが左レバーを手前に引き、戦車は左へ旋回する。またもやアクセルが踏み込まれ、『ミーティア』が吼えた。クルセイダーが再び、土煙を上げながら疾走する。心地よい風が体を叩く。

斜面に差し掛かり、車体が傾いた。しかし出力に余裕があるため、加速していたクルセイダーはどんどん登っていく。

「ブルーマロウ様、この速度で丘を越えると……!」

オレンジペコは察したようだ。だけどごめん、もうやると決めた。続いてルクリリも、ハツとして私を睨む。

「ブルーマロウ! まさか……!」

「ちよつと空中散歩をするだけさ。心配しないでよ、私たちは刎頸の友じゃないか」

「貴女みたいな変態のために首を刎ねられてたまるかッ! この××」

放送禁止用語で私を罵倒するルクリリ。こういう所も面白い人だ。そしてローズヒップの方は、順調に戦車を加速させつつ斜面を駆け上がった。

「よろしいですね!? ブルーマロウ様!」

声に狂喜と情熱が戻った。やっぱり彼女はこうでなくては。そして今は私も同じだ。

重力に逆らい、クルセイダーは駆け上がる。無限軌道を激しく回転させ、丘の稜線へ。そして、その先へ。

「構わない。壊れたら直してあげるとも」

砲塔の二人は覚悟を決めたか、或いは諦観したか、対衝撃姿勢を取る。ごめんよ、後で何かご馳走するから許しておくれ。

「飛べ、ローズ！」

「行ツツきますわよおお！」

履帯が稜線を踏み越えた瞬間。

私たちは、クルセイダーは流星^{ミューティア}となった。

エピソード

戦車は結構ジャンプする。戦時中の写真を見ても、クロムウエルやBTシリーズなど、足の速い車種は見事なジャンプを披露している。勇壮な光景なので宣伝には丁度良いだろうけど、大抵の戦車は空中での安定性や着地などを考慮した設計ではない。サスペンションや履帯・転輪に多大な負荷を強いる結果となるため、乗員としては極力避けるべきだ。90km/h以上の速度が出る現用MBTでは、操縦手は稜線を超える際に細心の注意を払うという。

それでも戦車道では、必要に迫られて行う場合もある。特にローズヒップは。だからここで足回りの強度をテストしておくのも必要と言えれば必要なことだった。

だが、半分は私自身が遊びたかっただけだ。彼女と一緒に。

「いやー、超最高の1日でしたわ!」

クルセイダーの側に腰掛けて、ローズヒップは満足げに笑っている。クルセイダーに損傷はなかった。着地時も履帯を回し続けているため、いくらか衝撃が緩和されたのもあるだろうが、それにしても運が良い。ただ帰ったら、足回りには入念な点検とメンテナンスが必要そうだ。

いつもの調子で地べたに座り、お行儀悪く脚を開いている我が後輩。引き締まった綺麗な脚なのに全く品がない。

「ブルーマロウ様、本当にありがとうございます! 少しでももっと、ダーズリン様のお役に立てますわ! そして……」

私の目を見て、ニコリと笑う。何かを決心した様子で。

「わたくしに後輩ができましたら、みんながこの改造クルセイダーに乗りたがるような……そんな活躍を試してみせますわ!」

その言葉を聞いてふと、ダーズリン様の言ったことを思い出す。私が職人、ローズヒップが芸術家。私の作ったものがこのグロリアーナで、先輩から後輩へと受け継がれていく。それがまた、新しい伝統となる。

その絆があれば卒業した後も、私はローズヒップたちと『家族』でいられる。そんな気がした。

おもむろに、彼女の脚をつついてみる。するとアツサム様に注意されたことを思い出したのか、開いた脚を閉じ、真っ直ぐに伸ばした姿勢に改めた。私はその隣に腰を下ろし、草の絨毯の上に体を横たえる。ローズヒップの白い脚を、枕の代わりにして。彼女は驚いたようだったが、嫌がることなく膝を貸してくれた。

粗野で、下品で、せわしない、ちよつと羨ましい私の後輩。

「これからもよろしくね」

「はい！　こちらこそ！」

「……スピード狂と技術バカを同じ戦車に乗せるのは危険だって、ダージン様と言っておかないと……」

「……同感です、ルクリリ様」